

### 課外活動のおもしろさ

カリキュラム外の活動、つまり日本の高校の部活に当たる部分も、似たような感じ  
で、日本の高校で通常提供されている活動  
は、ない。例えばイタリア校には体育館も  
陸上用グラウンドもプールもないので、陸  
上部も水泳部もない。その代わり、例えば  
トリエステ周辺の地の利を活かした、登山  
部ならぬ「洞窟部」があったりして、私も  
週末にはライトつきヘルメットをかぶりロ  
ープにぶらさがって、あちこちの洞窟へ降  
りていった。また、写真部のための暗室が



パーティーのため着飾った2人、左がこの写真を現像した友人、右が筆者

あって、生徒が単独で現像作業をすること  
を許されていた。私は写真に興味があっ  
たが、初心者として写真部に入った友人は、  
ここで写真を現像していた。

### 多様性の包容

イタリア校の特徴は、とにかく自由放任  
であった点。全寮制の学校だが、どんな時  
間帯にどこで何をしていようと、何も干渉  
されない。全寮制といっても起床時間なし、  
消灯時間なし、門限なし。また、集まって  
くる生徒が多様であるせいも、多様性に対  
する包容力が大変大きい共同体だった。標  
準・基準となる模範がない。周囲と比べて  
変わっている、という評価が成立する基盤  
がない。したがって、人と違うことを理由  
とする「いじめ」も発生する余地がない。  
毎日昼寝をする人、ルームメイトの所有物  
を何でも無断で使う人、喫煙する人など、  
日本の高校だとちよつと考えられない、ま  
たはまゆをひそめられる、または禁止され  
る行動が、問題視されずに受け入れられた。  
私はといえば、仲良くなった中国人の親友  
といつも行動をともにして、学食で食事を  
するのも一緒、放課後に図書館へ行くのも  
一緒、週末も一緒、どこへ行くときも二人  
で手をつないで、という生活を送った。し

ばらくすると「あの二人はレズビアン？」  
という噂が立った。しかし、その結果二人  
が不利益をこうむることは全くなかった。

### 国境、国籍に対する意識

イタリア校の場所柄もあって、二年間の  
生活のなかでは国境、国籍の意味を何度も  
実感した。ジョギングに行った人がうつか  
り裏山にある国境を越えて隣国(当時のユ  
ーゴスラビア)へ入ってしまった、パスポー  
ト不携帯のため抑留されたとか、パスポー  
トを持たず旅行証明書だけを所持する「難  
民」たる友人の存在とか、私自身の査証が  
切れて不法滞在、といった経験である。未  
熟ながら、人生で初めて、パスポート、国籍  
国境、難民、といったことに目を向けた。こ  
の経験のおかげかどうか全くわからないが、  
私の現在の仕事は、出入国に関する国家の  
権利、これらに関する個人の権利、難民条  
約が定める権利義務、国連難民高等弁務官  
事務所の役割などを含む、国際法という分  
野を大学院で教えることである。UWCに  
興味を持つ方には、国際協力・国際貢献に  
も関心を持つ方が多いので、私が大学院で  
担当しているいくつかのプログラムにも関  
心を持っていただければ幸いである。ウエ  
ブサイト<sup>(注)</sup>を<sup>(注)</sup>ごらんいただければ幸いである。

(注)神戸大学GSICS国際法プログラム<http://www.edukobe-uacjp/ilaw/gsics-icl/index.html>

神戸大学GSICS国際公務員養成プログラム<http://www.edukobe-uacjp/gsics-kk-program/index.html>

# 『君主論』、多様性、不法滞在 ——イタリア校での生活

神戸女学院高等部を中退して一九八六―八八年  
UWCイタリア校へ。一九九三年京都大学法学  
部卒業、外務省勤務・大学院在籍・同時通訳者  
などを経て、二〇〇三年より現職。

神戸大学大学院国際協力研究科准教授

林 美香  
はやし みか

## ▶ 日本にはない カリキュラムの特徴

一九八六年夏に、窓をあけると青いアド  
リア海が崖下に広がる五人部屋での寮生活  
が始まった。その直前まで私が通っていた  
日本の高校と比較すると、イタリア校を含  
むUWCが採用する、インターナシヨナ  
ル・バカロレア(IB)のためのカリキュラ  
ムはとにかく変わっていた。体育、音楽と  
いった、日本の高校のカリキュラムにあつ  
て私の好きだった科目は、カリキュラムに  
はない。反面、ありがたいことに私の嫌い  
な美術という科目もない。あれもない、こ  
れもない、なのだが、その分、日本の高校

にないものが多く提供されている。

イタリア校のカリキュラムでは、なんと  
いっても、イタリア語の授業が充実してい  
た。IBの科目としてのイタリア語は、国  
語と外国語の中間のような科目で、読み書  
き会話を習得した後は、文学作品を中心  
に講読・議論の授業になる。ウンガレッティ  
の詩を読み、ブツァーティの作品を読み、  
現代イタリア語とはかなり違うことばで書  
かれたマキャベッリ『君主論』のいくつか  
の章を読み、そしてクラスで議論する。ラ  
テン語系言語を母国語とする仲間がほとん  
どのこのクラスについていくのは、容易で  
はないが、楽しく刺激的な授業だった。ま  
た、よくできたカリキュラムで、日本の

● 他ユナイテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日  
本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちと  
の教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養  
成するという理念を掲げるUWCの日本委員会とし  
て、毎年一〇名前後の高校二年生を世界各地にある  
UWC傘下の高校に派遣し、すでに四三四名の卒業  
生を輩出している。

高校の中間試験・期末試験のような、短期  
の成果は求めてこない。じっくり勉強・議  
論した成果を、二年目の最後の(ほぼ)一  
発勝負である筆記・口述試験で発揮できれ  
ばよい。

カリキュラムの目指すところが、日本の  
高校といかに違うかは、IBの他の科目に  
もあらわれている。

「真実の探究において仮説の果たす役割は  
何か？」

「公正な社会は不平等を許容してよいか  
？」

このような題目を与えられて小論文をす  
らすら書ける高校生は、日本にはあまりい  
ないと思う。その訓練を受けないからであ  
る。これらは、バカロレア科目の一つであ  
る「哲学」の例題である。勉強する内容と  
いう点でも、試験が要求する能力という点  
でも、日本の高校カリキュラムと違うのが  
よくわかる一例であろう。